

露頭の風景 写真家の視点

斉藤 麻子

この日むかったのは、栃木県宇都宮市大谷町です。地下採石場跡を利用した大谷資料館や岩壁に彫られた巨大な平和観音など、町のあちこちで露わになった石を見ることができ、まさに石の町という呼び名がふさわしいところでした。

大谷石というのは崩れにくいものなのでしょうか。切り通しの崖に崩壊対策がとられているわけでもなく、また露頭をそのまま建物の一部として取り込んでいるようなものも見られ、地質を身近に感じることができました。ときおり石に入る黒っぽい筋のようなものや、無数に開いた穴が、同じ石にも様々な表情をつけています。今回の写真の露頭でいうと、前髪

を垂らした大きな顔が車を吸い込んでいるようにも見えて、露頭が巨大な生き物として現れたようです。特徴的な形をした岩が動物などに見立てられて“～岩”と呼ばれたり、奇岩という位置づけをされていることはよくありますが、露頭自体がなにかに見えるというのは珍しいと思いました。奇観と言うこともできるかもしれませんが、この石の町では昔からすっかり生活に馴染んでいる露頭の風景を、初めて訪れた私が奇か否か決めてしまうことは、少しおこがましいような気もしました。

地質屋の視点

及川 輝樹

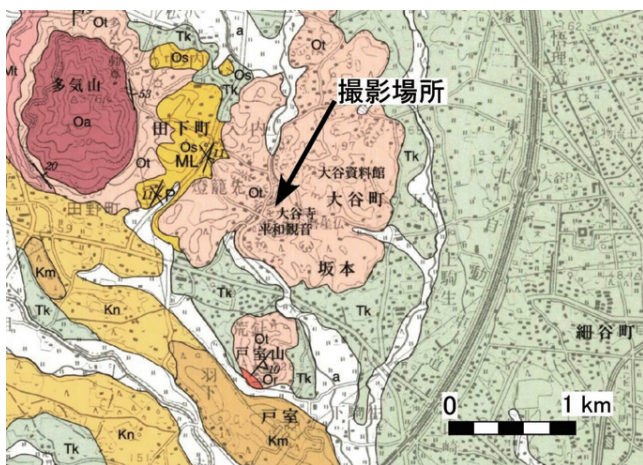
表紙写真の露頭は、大谷石で有名な宇都宮市大谷の露頭です。大谷石は、軽石などの火山噴出物が固まった火砕岩（凝灰岩）からなる石を採掘したもので、その名前は岩石名でなく石材名です。大谷石をよく見ると“ミソ”とよばれる淡く緑色に変質した軽石がたくさん含まれています。そのため軽石や火山灰などが固まった軽石質火砕岩であることがよくわかります。大谷石にぼつぼつと開いている穴は、この“ミソ”がぬけた跡です。この大谷石は、柔らかく掘るのが簡単で加工がしやすく、かつ均質であることから、石材として明治時代から広く使われるようになりまし

た。また耐火性に富むことから、蔵の建材として使われることが多く、栃木県下ではそのような蔵をよく見かけます。その他、旧帝国ホテルの玄関や日本民藝館の建物に使われていることでも有名です。軽石質火砕岩は、加工しやすく均質なものが得やすいことが多いため、日本各地で石材として採掘されています。大谷石が採れる栃木県下でも、時代や分布が異なる軽石質火砕岩が、岩船石（下都賀郡岩舟町）、芦野石（那須郡那須町）などの名で採掘されています。

大谷石は、大谷層のデイサイト～流紋岩質軽石質火砕岩を採掘したものを特にその名でよんでいます。大谷層は、軽石質火砕岩の他、凝灰質砂岩・シルト岩、溶岩でつくられた地層です。今から約1500万年前の新第三紀中新世という時代に、火山噴出物が海につもりできた地層と考えられています。この新第三紀中新世（約2300～500万年前）という時代は、それまで大陸にくっついていた日本列島が、日本海の形成によって大陸から離れた時期でもあります。そのため火山活動が活発で、日本列島各地に厚く火砕岩を堆積させました。大谷石はそのような時代につくられた岩石です。

文献

吉川敏之・山元孝広・中江 訓（2010）5万分の1地質図幅「宇都宮」及び説明書（地域地質研究報告）. 地質調査総合センター，79p.



5万分の1地質図「宇都宮」（吉川ほか，2010）の一部に加筆。Or, Oa, Os, Ot, が大谷層で、大谷石はOtから採掘されている。Km, Kn, Tk, a は第四紀の河川堆積物及びそれらを被覆する風成層。